

# テレビ批評集



ドキュメンタリー編

この電子書籍は、私春昼がブログで発表したテレビ批評の自作選です。ドキュメンタリー、ノンフィクション番組の批評を集めています。ブログでのテレビ批評は続いています。電子書籍の内容は、時々更新します。更新時にはこのトップページに更新履歴を書いていきます。[ブログ「7代後の孫への話」のリンクはこちらです。](#)

表紙画像は、ジョージ・フレデリック・ワッツ(1817-1904)「希望」(1886)です。希望とかいってかなり絶望的な状況の絵ですが(笑)、絶望的状況でも希望をつないでいく必要があるってことで。

<最近の更新履歴>

2010年12月5日：NHKBS『死の国の旋律～アウシュビッツと音楽家たち』の批評を追加しました。

## NHK『ふたり・しのぎあい、果てなき絆～日本料理人・山本征治×奥田透～』

(2010年8月21日ブログにて発表)

熱帯夜で眠れずにテレビを見ていたらNHKで『ふたり・しのぎあい、果てなき絆～日本料理人・山本征治×奥田透～』の再放送がやっていた。今まで何百本とテレビ番組を見てきたが、最良の番組だったと思うくらい、刺激を受けた名作だった。

『ふたり』は、二人の人物のドラマ、絆を描くドキュメンタリー。今回の二人は、四国にある老舗とともに修行時代を過ごした日本料理の達人。銀座に店を構える奥田さんは、ミシュランで3年連続星3つに選ばれた日本料理の王道を歩む人。六本木に店を構える兄弟子の山本さんは、ミシュランで星2つだったが、「世界のレストランベスト50」に日本料理で初めて選ばれた、日本料理の革新者。二人は今でも互いの店に通って、互いの料理を食べあい、議論を続けている。

何故この料理を出すのか、奥田さんの店に来た山本さんが矢継ぎ早に質問する。他にも色々な選択があるのに、何故この料理にしたのか、突き詰めて考えていけば、明確な答えが返ってくるはずだという山本さん。二人の一流料理人の語りに圧倒されたが、二人とも、最初から有名なわけではなかった。

奥田さんは四国の老舗に弟子入りした際、厨房にも入れさせてもらえなかった。与えられた仕事は、店主の運転手と、下足番。奥田さんは夜、仕事が終わった後に、一人料理の勉強を続ける。ある日遊びに行った兄弟子の下宿に、日本料理の本がたくさん並んでいた。蔵書を見て奥田さんはすぐ「こいつできるな」と思ったという。自分も読んでいる本が揃っているし、なかなか手に入らない日本料理の専門書も並べられていたという。自分と同じものを目指しているなど感じた奥田さんは、以降山本さんの下宿に足しげく通うことになる。

奥田さんは、兄弟子山本さんのことを絶賛する。発想、考え、作り出すもの、自分が勝っていると思ったことは一度もないという。神様は僕に山本さんが持っている才能を与えてくれなかったと涙を見せる。どんな大統領や首相や国王が食べに来ても、緊張しないが、山本さんが食べに来る日だけは嫌で嫌でしょうがないと語る奥田さん。山本さんに比べて才能がないと思った奥田さんは、日本料理の王道を突き詰める道を歩む。そして奥田さんは、ミシュランで3年連続星3つをとる。

星2つだった山本さんは、どんなに有名な人が星3つをとっていても、悔しいと思うことはないだろうが、奥田さんが星3つで自分は2つだった、こんな悔しいと思うことはなかった、思い出することもできないと語る。山本さんは日本料理の常識にとらわれない斬新な料理を次々と発表し、日本料理の革新者として、海外からの注目を集める。歴史的に評価されている日本料理と同じものを作っても、先人たちに申し訳ないと山本さんは語る。自分は日本料理をすごいと思っているの

だから、この歴史をさらに進めて、先人たちが見なかった次の料理を創造すること、先人たちと同じ土俵で戦うことが、自分の生きている責任だと語る。

無名時代、下宿で日本料理について二人で語り合っていた頃、奥田さんは、風船になった日本料理が火山の溶岩の中に入ろうとしたら、自分は命がけで風船をとりにいくと語ったという。山本さんは、自分も溶岩をおそれずに日本料理を守り抜くと答える。二人は、生涯をかけて、日本料理の頂点を目指す約束をしたのだった。

番組視聴中ずっと、自分の人生の歩み方について考えさせられた。インターネットの情報は、ゆるくて、柔らかいものが多い。久々にかっちかちにかたい本気の生き様を見た。考えて、考え抜いて、どういうものを創造するのか、いつでも答えられるようにしておくこと。常に誰より厳しく、自問自答を続けること。

もし小説や文学や哲学や思想が風船になって溶岩の中に落ちそうでも、自分は命がけで取りに行かないだろうと思った。さめていて、かつ自分がかわいいのだ。こうやってネットで書いていけば、表現欲求も緩和される。書くことを仕事にする必要はないんじゃないかと思うようになっていた。

しかし、何故書くのか？ 小説、文学、哲学、思想を信じることができなくても、言葉だけは信じることができる。何のジャンルにも特定されていない言葉になら、自分は、二人のように、命をかけることができる。昼間仕事をしていても、夜書くことができる。それで十分と思うのは、言葉に人生をかけようと思っていないせいだ。

テレビで見た二人は、一日中料理のことについて考え続けていた。言葉に本気で取り組みたいければ、少しでも多くの時間、言葉に取り組みたいと思うはずだ。自分が言葉を仕事にする理由を二人から与えられた。この熱を忘れずこれから生きていこう。

## NHK・BS世界のドキュメンタリー『よみがえる第二次世界大戦～カラー化された白黒フィルム』

(2010年1月2日ブログにて発表)

2009年12月末、NHK総合の深夜でBS世界のドキュメンタリーアンコールとして、『よみがえる第二次世界大戦～カラー化された白黒フィルム』が放送された。フランス、NHK共同制作、第二次世界大戦の白黒記録映像を最新デジタル技術でカラー化したドキュメンタリー番組である。

白黒とカラーでは迫力が全然違う。スターリン、ルーズベルト、チャーチル、ヒトラー、東条英機がカラーで喋っている映像も驚いが、街中に転がっている市民の死体、戦場で負傷した兵士、親を亡くした子どもの顔が、カラーで動いているのだ。白黒記録映像の数倍、映画やゲームや小説の数百倍、現実感と説得力があった。

マッカーサーは戦後日本に突然やってきたと思っていたが、元々マッカーサーはフィリピンにいたのだと知った。マッカーサーは日本の猛攻撃に耐えかねて一度アメリカに引き上げたが、太平洋戦争終盤、フィリピンに戻って日本軍と激戦した。マッカーサー率いるアメリカ軍と日本軍がフィリピン市街で激戦、日米両軍の戦闘に巻き込まれて、血まみれで横たわるフィリピン男性。彼が叫ぶ顔の形相が、頭に刻み込まれた。

フィリピンだけではない、サイパン、硫黄島、沖縄、アジア各地で日本軍とアメリカ軍が戦闘する。海に飛び込む日本の少年兵にアメリカ軍の銃弾が飛ぶ。撃ち殺された少年兵の体と血が太平洋に漂う。戦場で殺しあう日本人とアメリカ人、その戦いに巻き込まれて死んでいく現地の人々。映像を見ている最中ずっと顔が歪んだ。

ドイツ戦の記録も壮絶。パリを去る時、ヒトラーはパリ全壊を命じたが、パリ市民がバリゲードを築いて、ナチスの残存兵力と市街戦を繰り広げた。パリの道路で絶命したナチス将校に走り寄り、とどめを刺すパリ市民の青年と女性。生き残るための殺し合いだった。

トム・クルーズ主演で映画化されたヒトラー暗殺計画（暗殺失敗後ドイツ将校即刻大量処刑断行）、ピンチョンの小説に描かれたV2ロケットのロンドン襲撃、連合軍によるドレスデン他ドイツ諸都市への、原爆投下より強烈と言われた無差別空爆、どれもむごたらしかった。戦争終盤、ベルリン市街戦の光景は、少年兵の命を巻き込みつつベルリンの街が全壊しており、地獄絵図という言葉がぴったりだった。日本本土で決戦がなくて本当によかったと思っていたら、原爆投下により廃墟というか現代アートみたいになった広島映像がカラーで出てきて、顔がまた歪んだ。

性別年齢にかかわらず、たくさん人間が裸にされて、ごみのように積み重なっているアウシュビッツ他ユダヤ人強制収容所の映像のみは、白黒だった。ユダヤ人団体等の「大人の事情」に

より、強制収容所の映像のみ白黒になったのだろうが、裸で殺された人、一人一人を着色していったら、いくらデジタル技術に頼っても精神異常に陥るだろうと思えた。

第二次世界大戦関連資料で、この番組ほど衝撃的で印象深いものは過去なかったと思う。20世紀に起きた国家間の戦争は、絶対に繰り返してはならないと強く思える地獄の黙示録的映像。かつ、この後よくドイツと日本とイタリアは経済成長できたなと思える憎悪と人殺しの連続だった。

さて、昨年の世界恐慌は、第二次世界大戦前の世界恐慌以来の大不況になると予言されたが、世界は意外に大丈夫だった。経済はたぼろだが、アメリカ政府もEUも日本も、民主主義国家体制を続けているし、テロや事件は数多く起きてても、国家間の戦争は起きていない。21世紀、随分世界は危険になったと思いがちだが、2000年以降起きた国家間の戦争は、アメリカ・イラク戦争のみ。20世紀の大量殺戮の歴史から、人類は「国家間戦争こそ最悪だ」という事実を学んだようだ。

未来から振り返ってみれば、20世紀は、大量殺戮の世紀である。映像、証言、記録が残りまくっている。21世紀以降の人類は、20世紀に比べればましな社会を維持していけるだろうか。未来を担うのは、21世紀を生きている一人一人の選択による。

というわけで、あけましておめでとうございます。新年一発目から大変重い内容の記事でしたが、世界は想像以上に平和なものでした。この平和を維持していけるよう、今年も当ブログをよろしく願いいたします。



## NHK・BS世界のドキュメンタリー『エルサレム 二人の少女 自爆テロ母たちの対話』

(2008年11月24日ブログにて発表)

BS世界のドキュメンタリー・シリーズ和解への模索『エルサレム 二人の少女 自爆テロ母たちの対話』(2007年 フランス EJH プロダクション制作)を見た。

2002年3月、エルサレムの市場で自爆テロが起き、17歳の少女ラヘルが亡くなった。自爆テロを起こしたのは、ラヘルと同じく1984年生まれの18歳の少女、アヤトだった。イスラエルに暮らすユダヤ人のラヘル之母と、パレスチナに暮らすアヤト之母。ドキュメンタリー番組は、二人之母の対話を試みる。

番組を見て想起されるのは、厚生省元事務次官の刺殺事件だった。年金テロと表現されるそれは、犯人の動機に飛躍があると指摘されている。犬が殺されたからといって、何故直接関係もない事務次官の妻まで殺すのか。こうした批判は、パレスチナの少女に対する自爆テロ事件にも適応される。パレスチナがイスラエルの占領下にあるからといって、何故直接関係ない少女までテロの犠牲となるのか。あなたは自爆テロをしてまで、イスラエルの市民に報復する必要はあるのか、と。

元厚生事務次官宅を襲撃したのは、小泉容疑者単独犯でないかもしれないから、小泉容疑者の資金源まわりについての捜査がすすまない と、日本の事件について確定的なことは述べられないが、イスラエルで毎日起きている自爆テロについては、ある程度まとめて考察することができる。同時に、日本人がイスラエルで起きている自爆テロについて考える時、自爆テロの起源としてある、日本赤軍によるテレアビブ空港でのマシンガン乱射事件の存在を忘れてはならない。

番組中盤、ラヘル之母は、パレスチナの少女の話聞きに行く。自爆テロを実行しようと決意していたが、差し控えたという少女は、ラヘル之母に対して、私たちはイスラエルに迫害されていると言う。自爆テロによって子どもが殺されたら、イスラエルの人々も胸を痛めて、自分たちがいかに酷いことをしてきたかわかるだろうと主張する。ラヘル之母は、アヤトという自爆テロ実行犯の少女を知っているかと娘たちに聞く。娘たちはアヤトを知っていると言う。そう確認したうえでラヘル之母は、自分はアヤトの自爆テロによって、娘を殺されたのだという事実を娘たちに告げる。自爆テロが正しいことだろうか語る自爆テロ犠牲者之母に対しても、娘たちの主張は変わることはない。あなたたちの宗教は殺しを認めているのかという質問には、これは報復だと答えられる。激論を交わした後、ラヘル之母は、イスラエル政府の占領政策、過失については何も語らないまま、対話が成り立たないと言って嘆く。

番組の最後、ついにラヘル之母とアヤト之母の対話が、テレビ中継を通して実現する。ラヘルの

母は、友好的対話を望んでいた。友好的対話が成り立つためには、アヤトの母が、娘の自爆テロ行為は間違っているとラヘル之母に謝罪することが必要だったのだが、もちろんアヤト之母は、娘の死は正しいと思っている。アヤト之母は、対話が始まってすぐ、イスラエルの占領政策を批判する。突然パレスチナの地にやってきて、建国し、パレスチナ人を追い出したイスラエル。イスラエルは、パレスチナにミサイルを落とし、国も、住む場所も与えない。こうした現実を前にして、私の娘は自爆テロを行った。こう言うアヤト之母に対して、ラヘル之母は、あなたたちは何もかも占領のせいにするると批判する。

二人の対話は全く成り立たない。かたくなに占領政策を批判するアヤト之母と、かたくなに、何もかも占領政策のせいにするなど主張するアヤト之母。こうして番組は終わる。

ラヘル之母は、平和を望むのはいいが、暴力はいけないと主張する。これはテロ行為に対して、「西側」の社会で繰り返される論理だ。元厚生事務次官刺殺のニュースでも、暴力はいけないと繰り返される。しかし、パレスチナの人にとっては、暴力の行使でなく、報復なのだ。イスラエルが暴力的に自分たちをパレスチナの地から追い出したから、ミサイルを打ち落としてくるから、報復として自爆テロを行う。イスラエルの市民には、暴力の一方的な行使と見えるものが、パレスチナの人にとっては、イスラエルが振るってきた暴力に対する報復と認識される。暴力はいけないと批判するお前たちの方こそ、最初に暴力をふるってきたのではないかという反抗。この認識の相違をイスラエルの人々が認識しないかぎり、パレスチナ問題は永続するだろう。しかし、イスラエル人はそうとは認識できないだろう、自爆テロを報復であると認識してしまえば、イスラエル建国の意義が崩壊してしまうのだから。

小泉容疑者が語る、家族を殺されたことに対する報復としての元厚生事務次官殺し。私たち社会の側の論理からすれば、暴力はいけない、犬を殺した人と、犠牲者となった元厚生事務次官は直接関係ないと批判されるべき行為だ。これは、イスラエルの人にとっての自爆テロ認識と同じではないだろうか。自爆テロは暴力だ、暴力はいけない、犠牲者となった少女と、あなたたちの住む地域に爆弾を落とす政府は、全く異なるものだという主張との同一性。

小泉容疑者は、バックにある組織の鉄砲玉ではないかという疑惑がある。警察出頭時、証拠品を全て持っていくという手口が、鉄砲玉の王道なのである。小泉容疑者がどこから収入を得ていたのか判明しないかぎり、犬の死と刺殺事件は決定的に結びつかないが、イスラエルでは、イスラエルの人から見れば、論理的に結びつかない、暴力としか見えない、自爆テロが続いている。日本人にできるのは、事実を認識し、何かしらの発言を行うことだけだろうか。

## NHK・E T V特集「生きていてくれて、ありがとう～夜回り先生・水谷修のメッセージ2」

(2005年11月6日ブログにて発表)

11月5日夜、NHK教育テレビにてE T V特集「生きていてくれて、ありがとう～夜回り先生・水谷修のメッセージ2」が放送された。

私はこの放送を、近所の温泉の休憩室においてある液晶ワイドテレビで途中から見た。放送内容に大変感銘を受けた。今後の人生と仕事の指針を与えられた気がした。

自分は今まで仕事をしていなかったし、生きてもいなかったことを知った。水谷先生は子供たちからのメールに毎日答え、夜中の電話に真摯に対応する。講演中、昨日は500通以上のメールが来たと言っていたし、電話がかかってくるのは夜中の2時頃が一番多いと言っていた。夜回り先生は修道士のごとく、子供たちの人生、命のために働いている。全国を講演にまわり、本を出版し、毎日寄せられる子供たちの相談に真摯に答える。生活のすべてを子供たちの人生のために捧げること、これこそ仕事であり真の人生だと思えた。今まで私はなんてエゴイスティックなことに悩み、エゴイスティックな仕事をしてきたのかと反省した。

水谷先生は相談を寄せてくる子供たちに、もっと人と関われと言う。リストカットするなら親の前で見せてやれ、見せるのが恥ずかしいなら、したことを黙ってないで言え。人にありがとうと言おう、ありがとうと言われることをしよう。苦しいなら人に話せ、何故苦しいと言わないのか。自分の中ばかり見つめていないで社会に意識を向けろ。

こう書くと何だか教条的に響くが、彼は深夜、電話をかけてきた子どもたちに向かって真正面に語りかける。番組の中で子どもと先生の電話内容が何個か放送された。どれも深刻な話し合いで、視聴者の私も興奮しながら集中して聞いた。彼の講演もまた、実に聴く者の集中を誘う話し方だった。これこそ面白い話というのだろう。面白い話とは滑稽なお笑い草の話ではなく、人の注意を極度に誘う話のことを言うのだろう。水谷先生のような面白い調子でみなに語りかけられたらと思った。

彼の助けを本当に必要としている人がいるから、彼は働く。これが仕事であり、人生だろう。この番組を見る直前、私はまた嫉妬とか、文学の仕事を人に言えない悩みを抱えて悩んでいた。番組を見て、嫉妬を抱く私みたいな人間は、働いていても働いていないのと同じだと思えた。

嫉妬を抱く余裕などなくなるほど真摯に、誠意をもって真面目な文学の仕事をしようと思った。仕事が常に人に関わっていく性質のものであれば、助けを必要としている人のために仕事をしているうち、労働者の側に寂しさとか嫉妬心とか名誉心はなくなるだろう。彼の心のうちには、人の人生に積極的な影響を与えているという喜びがある。働くだけで彼は幸福となるから、過度の快楽や愛情を求めることがなくなるだろう。仕事を通して周囲に愛を与えていくこと。あふれている愛に気づかないから、嫉妬が起きる。周囲に愛はありあまるほどあふれているのだから、嫉妬など抱く必要はない。

これから私は水谷氏の気概で、同時代の悩める人のために文学の仕事に集中していこう。新人賞をとったとか本が出版されたとか、文学の仕事からお金が入ったとかそんなことは、仕事の本質とは全く関係ない。

ただ読者の人生に積極的な影響を与えること、文章創作を通して愛をふりまいていくことこそ、文学の仕事の本義であり、それさえあれば、嫉妬心も名誉心も独占欲も寂しさもなくなるだろう。欲したものが得られず苦しむ人たちのために、書くだけである。

## NHK『世界ふれあい街歩き「ミュンヘン・ドナウ」』

(2009年4月3日ブログにて発表)

「世界ふれあい街歩き」は、NHK総合で夜遅い時間に時々放送している。テレビをつけると時々出てくるので、何の気なしに流しておく。別にだらだら見ている、パソコンしながらでも、ほとんど注意を画面に向けていなくても、問題ない。柔らかい番組だ。一人称視点でカメラが外国の街を移動。街歩く人と交流する。街を眺めての感想、街の人との会話をナレーターの矢崎滋が日本語で語る。

北朝鮮のミサイルは発射されるのか問題とか、見知らぬ通行人を殴り殺したやつは何を考えていたのか問題とか、ますます深刻になる世界不況の問題とかいろいろあるので、NHKBSの海外ドキュメンタリー番組で、ベルリンの壁崩壊時の東西ドイツ統合の様子を見ていた。アウシュビッツの問題とか、第二次世界大戦後の日本とドイツの謝罪の違いとか、いろいろ小難しいことを考えていたけれど、現代ドイツで生きる人々の様子を見ていたら、心が和んだ。

朝からビールを飲み、白ソーセージを食べて微笑むドイツのオヤジたち。可愛い女の子も、ビアホールでノンアルコールのビールを飲んで乾杯。何もかもが幸福に包まれ、赦され、祝福されているような気がした。番組の視点の違いだ。

ドキュメンタリー番組は世界史の深刻な面を描くけれど、「世界ふれあい街歩き」は、自分たちの社会と歴史を肯定して毎日の日常を過ごしている平和な人々の様子を描く。アウシュビッツの惨事も、ビアホールの平和な朝も、両方ドイツで起きた出来事であり、どちらも真実だった。

「世界ふれあい街歩き」を眺めていると、海外の小説を読んでいるような気になる。街に生きる人々の楽しげな様子。暗い社会問題は、あまり表に出てこない。表面をなでるだけの観光気分かもしれないけれど、海外旅行に行っていないのに、現地の街並みや風景を感じることができるのは悪くない。小説を読むより、飛行機に乗るよりずっと気楽で手軽に、ドイツを観ることができる。

バイブで肩をマッサージしながら観ていて思ったのは、テレビカメラが眼をむけ、話しかけた若い女性がみな、美人だということだった。僕はアメリカのシカゴ周辺と、タイのバンコクにしか行ったことがないけれど、どちらの国を訪ねたときも、アメリカ映画や、タイ映画に出てくる人気の女優たちより、街中を歩く女性の方がきれいだと思えた。なんで彼女たちは女優になって、映画に出ないのかと悩むほどだった。

やっぱり映画で見ると、現実の女性を見る方がいいのかと思ったけれど、今日ミュンヘンの街並みをテレビカメラ越しに観た時も、ドイツ映画に出てくる女優より、街中の女性の方がきれいに見えた。

映画女優はみな美人という考えは、マッチョ的大誤解だろうか。街に生きる低い視点で、世界を見たから、女性がみなきれいに見えたのだろうか。街に生きる彼女たちが映画に出たら、美人とは思えなくなるのだろうか。その場合、つくりものめいた映画の脚本、演出、カメラワークの方が、生きる女性たちの魅力を台無しにしたと言えるんじゃないだろうか。

NHKスペシャル『天空の一本道～秘境・チベット開山大運搬～』～何故山奥の秘境で暮らすのか

(2010年11月21日ブログにて発表)

NHKスペシャル『天空の一本道～秘境・チベット開山大運搬～』が放送された。中国の秘境・チベットのヤルツァンが大峡谷をテレビ初取材。標高4000m以上、ヒマラヤ山脈の東端、絶壁が500kmも続く世界一の大峡谷だ。

人一人がやっと通れる山沿いの細い道。一步間違えたら、崖から落ちて死亡確定。歩くと靴も靴下も泥だらけ。最深部にチベット少数民族の人々の村がある。夏、峠の雪が解けると、村人たちは、食料、医薬品、家具、家電製品などを中国の町から、何日もかけて村に運ぶ。馬も村人も大量の荷物を背中に抱えて、絶壁の道を進む。途中、脚がへろへろになって動けなくなる馬もいる。過去、人も馬も崖から落ちて死んでいる。それでも村人たちは、天空の一本道を渡る。

妻に洗濯機が欲しいと言われて、洗濯機をかついで山に登る村人。今度結婚するからと、華やかな柄の家具を背中にしょって運ぶ若者。こんな絶壁を何故歩くのか不思議だった。重い米袋を背中に抱えて山に登る馬の心も理解できなかった。こんな苦しい山道の旅を、人間の命令でやられているようにも見えた。

何故村を出て、中国の町に移り住まないのだろう。不思議に思えたが、村に荷物を届けると、村人たちは年収の3分の1に値する大金を手にする。夏の間、村人たちは天空の一本道を何往復もして金を稼ぐという。洗濯機を運んでもらった妻は、来年は冷蔵庫が欲しいと言う。洗濯機あんなに重そうだったのに、今度は冷蔵庫？、きつそうだけど、夫は妻のために喜んで冷蔵庫を運ぶだろう。

100人以上の生徒が通う村の小学校の机、椅子、セメントなども、天空の一本道を運ばれてきたという。洗濯機を運んだリーダ格の男性は、山を降りて町に移り住む気はないと語った。自分はずっと運搬を続けたい、塩と水があれば生きていける、この村にずっと住みたいと笑顔で答える男性。彼に迷いはなさそうだった。



人間は生まれ育った村に住みたいものなのだろうか。移動する自由とともに、生まれた場所に住む自由も保障されるべきだが、物質に溢れた、安全な東京で、あの旅を見ていると、都会に出たらもっと楽なのだと思う。もちろん都会にも様々な不幸やストレスが溢れているけれど、都会には物質的な豊かさがある。

今ある環境が嫌なら別の場所に移り住めばいい。日本で就職できないなら、別の国で就職したらいい。と言っても、あまり海外に就職しようとする人はいない。人には移動する自由があるが、生まれた国に留まり続ける自由もある。日本はこれからどんどん貧困化していけど、多くの日本人は、海外に移り住まず、日本に留まり続けるだろう。それも人々の自由な選択だ。文句ばかり言っているけど、日本が好きだから、日本に留まるのだろう。

自殺したり病気になるくらいなら、日本を出るか住む地域を変えて、別の可能性を模索したらいいのと思うが、そもそも自殺する人には、別の可能性が見えないのではないか。僕にも、多くの人にも、多様な選択可能性はある。人生を選び取る自由がある。しかし、自分自身で可能性を萎めて、自ら不幸な選択をしているのかもしれない。

できるだけ快適で美しい選択をなしていくよう心がけたいと思った。

## NHKBS2で『死の国の旋律～アウシュビッツと音楽家たち』

(2010年12月5日ブログにて発表)

NHKBS2で『死の国の旋律～アウシュビッツと音楽家たち』が再放送された。アウシュビッツでは、ユダヤ人の囚人たちによるオーケストラが結成されていた。オーケストラ団員は、処刑の際に楽しい音楽を流したり、強制労働の際にBGMを演奏することをナチスに求められたという。オーケストラ団員になると、生還の可能性が高くなるため、団員希望者は殺到したそうだ。菊地成孔+大谷能生の『アフロディズニー』他彼らの大学講義録を読んできた自分としては、アウシュビッツで音楽というだけで、見てみたいと思った。

番組では、生き残ったオーケストラ団員の女性、ゾフィアさんがアウシュビッツで体験したことを証言した。ガス室送りの際は、明るく楽しい音楽が演奏される。悲劇が隠蔽される。天使のようなモーツアルトの音楽とともに、処刑が行われる。(強制収容所の兵士が、ゲーテの詩を読んでいたという事実を思い出す。「アウシュビッツの後で詩を書くことは野蛮である」なら、アウシュビッツで処刑に使われたモーツアルトの音楽を聴いて、健康になるとかりラックスするとか言うのも不謹慎になるだろうか)

アウシュビッツにやってくると、楽しい音楽で歓迎される。ここって素晴らしい天国かと思ったら、強制労働の果てに処刑が待っている。これから殺されるとわかっているのに、ガス室に向かって歩く人たちを見送るのは、華やかな音楽。そんな音楽演奏するなんてひどすぎると、罵倒されることもあったそうだが、楽団員はいつでも冷静に演奏するようにナチスに命令されていたという。命令に従わなければ、楽団員を首になって強制労働者の仲間入り。命をかけた極限状況の選択。

老齢となった語り手のゾフィアさんが、アウシュビッツに花を捧げに行った。ゾフィアさんは、アウシュビッツの極限状況でも、正気を保ち続けたマリアという女性の話を始めた。マリアは、助産婦の仕事をしていた。生まれたばかりの赤ん坊を水に沈めて殺せと兵士に言われた時、マリアは何度も抵抗したそうだ。マリアはアウシュビッツで生まれた赤ん坊の体を水につけて洗うため、遠い水汲み場まで水を汲みに歩いたという。あの長い距離を彼女は一人で何回も歩きました、すぐガス室送りになるとわかっている赤ん坊のために、彼女は水を汲んだのです、とゾフィアさんが語った。

監禁、虐待などの極限状況において、トラウマを残さないためには、監禁される前の自分の生活態度、価値観を貫くことが大切だと言われる。死と隣り合わせの極限状態で、やがて死ぬべき運命を持つ新しい命を助けようとするマリアは、アウシュビッツでも助産婦の仕事が続けた。現代社会全体が今ネットの情報の勢いにもまれて異常状態にあるように思えるけれど、マリアみたいに生きていきたいと思った。

ゾフィアさんは語りの最中、何度も文学的、詩的な表現をする。日常会話が文学になっている。多分テレビカメラを意識しているわけではなく、普段からあの喋り方なのだろう。19世紀ヨーロッパ的な伝統の生き残り、ユダヤ人の女性音楽家。大時代的な詩的表現が日常会話に次々出てくるのって、ネットの時代ではもう記念碑的なものだと思えた。

アウシュビッツには、多くのユダヤ人音楽家が収容されていた。チェコの指揮者アンチェルも、アウシュビッツで音楽を演奏した。アンチェルはチェコでオーケストラの指揮者をやっていたが、チェコがナチスドイツに支配された後、テレジン収容所へ収容され、その後アウシュビッツへ移送される（テレジン収容所はユダヤ人虐殺の事実を隠蔽するため、ユダヤ人芸術家たちによる音楽、芸術活動が盛んに行われた場所とのこと。なお基礎教養として書いておくけど、ドイツの国民も連合国の国民も、ユダヤ人大虐殺が行われている事実は知らなかった。戦後になって初めて、死体の山が見つかって世界中に衝撃が走った）。

アンチェル本人は終戦後指揮者の活動を再開したが、アンチェルの家族全員は、アウシュビッツで処刑されたという。家族全員がアウシュビッツで処刑という話を聞いたら、涙が出てきた。生き残って音楽活動を続けられても、家族全員処刑されたら、一生尾をひきそうだ。

音楽が人間に影響を与えるか、ある音楽が人を楽しい気分させたり、悲しい気分させたりできるのか、音楽理論的には実証されていないと、菊地+大谷の『憂鬱と官能を教えた学校』には書かれていた。音楽で人間をコントロールできるなら、音楽で人を犯罪者に仕立てたり、幸福者に仕立てることもできるはず。聞いて楽しくなる音楽、悲しくなる音楽は、個人で思い当たるのがあるかもしれないけど、絶対的に誰もが聞いて楽しくなる音楽というのは、音楽理論的に存在証明されていないという。

とは言うものの、工場で音楽をかけると労働生産があがると、学者が言うと、確かにそうだとなって、世界中の工場や労働現場でBGMがかかるようになる。軍隊も行進中にマーチをかける。アウシュビッツでもガス室送りのBGMとして楽しく天国的な美音が奏でられる。さて、音楽が普遍的絶対的に人の感情をコントロールできるなら、囚人演奏者もドイツ兵もガスで殺される人も、全員ハッピーで喜びに包まれながら時間が過ぎるはずだけれど、実際音楽にそんな力はない。こんな時にそんな音楽かけるなんてひどすぎる！と殺される人が発言する。演奏者は彼女の発言を聞いてトラウマになる。ドイツ兵は秩序を維持しようとするためストレスがあがる。この時、楽しい音楽は、三つの別の立場にある人たち全員を不幸にするというか、極限状況をさらに極限状況に追い込んでいる。

絶対普遍に万人を幸せにする音楽も小説も映画もない。逆に万人を不幸にしたり、万人を犯罪者にする音楽も小説も映画もない。それっぽい作品はあるかもしれないけど、絶対にそうはならない。芸術表現は、薬物ではない。科学的効果を狙うには、冗長すぎるのだ。楽しい場面で突然悲しい事故がおきたり、悲しい場面に場違いな楽しい音楽が演奏されたり。明るく楽しい場所に行くと、どっぷり暗く落ち込む人もいれば、陰鬱な場所に行くと、楽しくてしょうがないという人もいる。人間は不思議な動物だ。

なんか話まとまっていないけど、よい番組でした。人間は科学の合理性だけでは理解できない多様な非合理的部分を持つということで。それこそ音楽や芸術が扱う領域です。